



慶應義塾大学ビジネス・スクール

株式会社 三木

株式会社三木は香川県高松市に所在する酒類小売店で、業務用の酒類販売を中心に急成長を遂げ、昭和56年度の売上高は10億円を越え、四国全域で首位を争っていた。同社は昭和57年の初夏には、本社を市の郊外に移転して、わが国では前例のない100坪の大型店舗をそこに構える計画であった。事業の拡大につれて、同社の従業員は20名を超え、組織のあり方、従業員の労務管理や人材育成にも再検討を迫られていた。

10

会社の沿革と現状

三木酒店の沿革は、現社長佐藤功氏の母方の祖父が営んだ造り醤油屋に始まる。祖父は、いろいろな事業に手を出したが結局失敗して酒店を一軒現在地に残した。その店は祖父のあと、功氏の叔父が短期間経営を引き受け、叔父の出征後は功氏の母親があとをつぎ、戦後は、職業軍人で公職追放の身となった父と母が同店を経営していた。

15

佐藤功氏は昭和29年に早稲田大学商学部に入學した。本人は文学部を志望していたが、両親の反対で商学部に進学した。当時65才だった父親は病弱で、功氏は大学に1年通学したあと、両親の意向を容れ、大学を休学して家業についた。父親の健康が回復すれば1年後に復学するつもりであったが、父が高齢であることを考えて、功氏は1年後に退学を決意し、家業に専念することになった。

20

「私は兄と姉の3人兄弟ですが、商売の後継ぎに乗り気ではありませんでした。ただ小さい時からよく店に来て手伝ったりしていましたので、ひそかに見込まれていたようです。家業を引受けてからは、仕事がとくに苦痛ということはありませんでしたが、一体どうやって商売するのもわかりませんでしたので、『商業界』のセミナーなどに出て勉強したものです。昭和31年に退学届を出して“商人としてやっていこう”と決心しましたが、その時、“どうせやるなら、高松で一番になってやろう”と心に決めました。大学に行っている友達に対する意地みみたいなものもありました」と佐藤社長は当時を回顧している。

25

21才で家業を継いだ当時、三木酒店は月商60万円程のごくふつうの酒屋であった。「30才までは何もわからずにただガムチャラに走りまわりました。休みも元旦だけでした。し

30

このケースは、中小企業振興事業団の支援と匿名企業の好意ある協力の下に、慶應義塾大学ビジネス・スクール教授石田英夫が、クラス討議の資料として作成したものであり、経営管理上の適切または不適切な処理を例示するものではない。尚、本ケースの作成にあたっては、中小企業大学の久保豊行氏より多大なる協力を得た。